

1	北海道鹿追高等学校 外8校（園）	27～29
---	------------------	-------

## 平成29年度研究開発実施報告書（要約）

### 1 研究開発課題

幼小中高13年間を見通した、グローバル社会に対応した新設教科「地球コミュニケーション」と「新地球学」のカリキュラム開発  
～21世紀を生き抜く汎用的な資質や能力を持つ人材の育成～

### 2 研究の概要

#### (1) 地球コミュニケーションの概要

英語を中核にした多様なコミュニケーション能力の向上を図るため、幼児期から高校までを視野に入れた新設教科「地球コミュニケーション」のカリキュラムを開発する。

- ① 幼小中高13年間の「地球コミュニケーション」のカリキュラムの区切りを「1-4-4-4」とし、CAN-DOリストを活用した授業実践を行うことで、高等学校卒業段階において、幅広い話題を外国語で適切に伝え合ったり、的確に理解したりする能力が身に付いたか検証する。
- ② 新地球学や各教科等における学習内容を言語活動の題材として活用し、コミュニケーション能力の向上を図ることにより、園児や児童生徒が主体的に学ぶ力を身に付けることができたかどうか検証する。

#### (2) 新地球学の概要

これまでの「新地球学」の研究を通して作成した教科書を使用し、より汎用性の高い環境教育プログラムの構築を目指し、指導方法の改善・充実を図る。

- ① ルーブリックを作成して、児童生徒に身に付けさせたい資質・能力を教師と児童生徒の間で共有し、ESDの視点に立って、系統的に指導していくことでどのような効果があるか検証する。
- ② 主体的・対話的で深い学びの視点から教科横断的に持続可能な開発のための教育を推進していく中で、児童生徒にどのような力が身に付くのか検証する。

### 3 研究の目的と仮説等

#### (1) 研究仮説

昨年度までの新設教科の学習を通して、児童生徒に体験を通して、身近な地域から世界とのつながりや、地球規模で環境を守る意味について考えさせる教科研究に取り組んできた。今後、グローバル化が加速する社会において、児童生徒は自ら考え、能動的に変えていくような資質・能力とともに、学んだことを活用する主体的な人格をもつことが不可欠となる。そこで、これまでの教科のねらいに対し、系統性を高めるなど、さらに実践的コミュニケーション能力を向上させ、教師自らの教科横断的な視点を高めるために次のような研究仮説を立てた。

身に付けさせたい資質・能力（主体性・かかわり・考動力）の全体像を明確にし、ESDの考え方に基づいた新設教科「新地球学」について、他教科と関連付けながら系統立った指導を行うことで持続可能な社会づくりのための資質・能力を身に付けることができる。

また、英語を中核とした新設教科「地球コミュニケーション」において、幼小中高の13年間におけるカリキュラムの区切りを「1-4-4-4」にして系統的に指導を行うことにより、グローバル社会に対応した資質・能力を身に付けることができる。

#### (2) 教育課程の特例

小学校 第1学年	「生活」の一部(54時間)を削減し総授業時間数に12時間を加え「地球コミュニケーション」(34時間)、「新地球学」(32時間)を実施
小学校 第2学年	「生活」の一部(55時間)を削減し総授業時間数に12時間を加え「地球コミュニケーション」(35時間)、「新地球学」(32時間)を実施

小学校 第3、4学年	「総合的な学習の時間」(70時間)を削減し「地球コミュニケーション」(35時間)、「新地球学」(35時間)を実施
小学校 第5、6学年	「総合的な学習の時間」の一部(35時間)と「外国語活動」(35時間)を削減し「地球コミュニケーション」(35時間)、「新地球学」(35時間)を実施
中学校 各学年	「社会」(5時間)、「理科」(5時間)、「外国語」(35時間)、「総合的な学習の時間」(25時間)を削減し、「地球コミュニケーション」(35時間)、「新地球学」(35時間)を実施

#### 4 研究内容

##### (1) 教育課程の内容

###### ① 地球コミュニケーション…学習指導要領において目標を次のように設定した。

<p>第1章 「地球コミュニケーション」の目標</p> <p>21世紀の国際社会に貢献し、これからの社会を担う人材の育成を図るため、国際理解教育を推進し、他国の文化を尊重するとともに、我が国の文化や郷土を愛する態度を養う。また、外国語によるコミュニケーション能力の育成に努めることによって、異文化理解を深め、交流に資する力を身に付ける。</p> <p>(1) 異文化理解の視点で国際理解教育を促進し、我が国の文化や郷土をより良く理解し、他国の文化を尊重する態度を養う。</p> <p>(2) 児童生徒における異文化理解促進の一つの手段である英語によるコミュニケーション能力の向上を図る。</p> <p>(3) 21世紀の国際社会に貢献できる人材の育成を目指し、地域教育資源及び施策等を活用した教育活動を推進する。</p>
--

##### 〈こども園〉

- ・5歳児と小学校低学年児童との交流授業において、園舎ではハロウィーンやクリスマス等の行事のなかで、ALTによる読み聞かせや英語を用いて小学生との交流により、コミュニケーションの喜びを味わわせる機会を設定する。小学校舎では体を動かす学習内容を取り入れ、授業を通して学びの基礎を培う機会を設定する。そのために園・学校生活全体として、「学びの芽生え」から「自覚的な学び」へとスムーズな接続が図られるよう園と小学校のカリキュラムを比較検討し「すくすくカリキュラム」を作成、実施する。

	4月(1・2週)	4月(3・4週)	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
行事	こども園 入園式 通級・入学お祝い会	こども園 身体測定 避難訓練	こども園 春遠足 家族参観	こども園 運動会 親子バス遠足	こども園 夏祭り お泊まり会	こども園 夏休み	こども園 みこしパレード いも掘り	こども園 家族参観 ハロウィーン		こども園 もちつき会 クリスマス会	こども園 モリサベリ	こども園 節分 年中運動会 一日入学	こども園 卒業式
小学校	入学式		校外学習	運動会	1学期終業式	夏休み			学習発表会	2学期終業式	冬休み	一日入学	卒業・修了式
授業の展開 交流授業	・生活科 「小学校はこんなところ」 ★生活ルールの習得 ★友だちづくり	・生活科 「学校探検」 ★2年生との交流授業		交流期間① 6/14～18日 地コ交流授業		交流期間② 8/22～9/13 地コ交流授業			交流期間③ 11/15～12/9 地コ交流授業		・生活科 「新入生に小学校のことを説明しよう」		
教師間連携		こども園側の小学校授業参観【フォローアップ①】		小学校運動会見学		情報交流・授業参観【フォローアップ②】 経過交流(学習面)・生活面			小学校学習発表会見学		情報交流・授業参観【フォローアップ③】 1年生のまとめ、次期スタートアップフォローアップカリキュラム確認	小学校側のこども園授業参観	引き継ぎによる情報交換
イメージ	「生活する力」 ◎学校のルール ◎基本的生活習慣										「生活する力」 ◎小学校生活へ向けた取組(時間の区切り方・持ち物の扱い方)		
	「かかわる力」 ◎友だちづくり ◎集団意識										「かかわる力」 ◎小学生とのかわり、小学校の先生とのかわり		
													「学びの力」 ◎遊びの場から学びの場へ
	スタートカリキュラム						アプローチャカリキュラム						

【すくすくカリキュラム(幼小接続期間計画表)】

##### 〈小学校〉

- ・これまでの教科書を活用すると共に交流授業を年間指導計画に位置付け、学び合いの場面を入れて再編成する。また、評価については高等学校卒業時での目指すべき姿から系統立てたCAN-DOリストをもとに見取る。
- ・異文化や他国の言葉に対する興味や関心を高め国際理解の基礎を培うため、JICA帯広や地域に長期滞在している外国人等の協力のもと、世界の人々との交流を図る。
- ・コミュニケーションツールとしての英語力を児童自身で確認できるよう実用英語技能検定の受検を補助する。

- ・ESDの視点に立った学習指導のために、重視する能力・態度を示し、新地球学や他教科との関連を図る。また、ふるさと学習を基にアイヌの人たちの文化や言語について学習する。

### 〈中学校〉

- ・これまでの教科書を活用すると共に、交流授業を年間指導計画に位置付け、リトルティーチャーや学び合いの場面、発信活動を多く取り入れた計画を編成する。また、評価については高等学校卒業時での目指すべき姿から系統立てたCAN-DOリストをもとに見取る。(次表)
- ・コミュニケーションツールとしての英語力を生徒自身で確認できるよう実用英語技能検定の受検を補助する。

### 【Speaking の CAN-DO リスト】

高3	S29. トピック(「外国人観光客を呼ぶにはどうしたら良いか」)について考えを説明することができる。 S30. 地球環境の保全について自分の考えを説明することができる。 S31. 自国と外国の食文化の違いについて自分の考えを説明することができる。
高2	S26. 指定した単語(aboriginal/trading等)を用いて、自国のことを説明することができる。 S27. 留学する際に持っていくと良い物を下級生に紹介することができる。 S28. 自分の考えたゴミ処理のシステムについて発表することができる。
高1	S23. 学校生活や自国のこと、住んでいる地域について、話すことができる。 S24. 共通した話題に関して、会話をすることができる。 S25. 画像や資料を提示しながら他の人に伝えることができる。
中3	S19. 自分・他人の特徴などについて単語をつなげながら相手に伝えるように説明することができる。 S20. 物事に対する考えや意見を、その理由を示しながら話すことができる。 S21. スピーチの内容や自分に関する質問に簡単な英文で答えることができる。 S22. あるテーマについて150語以上でまとめられたスピーチ文を、原稿を基に発表することができる。
中2	S16. 日本の文化や伝統について英語で20文程度にまとめたものを発表することができる。 S17. 夏休みの予定や自分が行きたい外国について、数文で発表することができる。 S18. 将来の夢について、理由も含めて120語程度で発表することができる。
中1	S13. 初歩的な英語を使って、ヒントを得ながら自己紹介をすることができる。 S14. 簡単な表現や決まり文句を使って話すことができる。 S15. 例文を参考にしながら、自分の町についての紹介を80語程度で話すことができる。
小6年	S11. 簡単な内容について、アイコンタクトやクリアボイス、ジェスチャーなどを使って、発表をすることができる。 S12. 初歩的な会話で使われる表現についてヒントを得ながら正しく発音することができる。(自己紹介、世界の国々、友達紹介など)
小5	S9. 初歩的な会話において、アイコンタクトやクリアボイス、ジェスチャーなどを意識して、発表をすることができる。 S10. 初歩的な会話で使われる表現についてヒントを得ながらおおむね正しい発音をすることができる。(自己紹介、世界の国々、友達紹介など)
小4	S6. 初歩的な会話で使われる単語についてヒントを得ながらおおむね正しい発音をすることができる。(自己紹介、相手に聞き出そう、道案内、人物紹介など) S7. 短い簡単なスピーチや会話におけるアイコンタクトやクリアボイス、ジェスチャーなどの工夫がわかり、意識して話そうとすることができる。 S8. 単語のアクセントに気を付けながら、相手に伝えるように発音することができる。
小3	S3. 初歩的な会話で使われる単語についてヒントを得ながら、おおむね正しい発音をすることができる。(自己紹介、相手に聞き出そう、道案内、人物紹介など) S4. 短い簡単なスピーチや会話におけるアイコンタクトやクリアボイス、ジェスチャーなどの工夫がわかる。 S5. 単語のアクセントに気を付けながら、ヒントを得ながら発音することができる。
小2	S2. 4～5語程度からなる文についてヒントを得ながらその一部の発音をまねることができる。(Hello English、学校探検に行こう、どんなもの?どんな様子?、～できる?など)
小1	S1. 名詞や数字を中心とした基礎的な単語を、ヒントを得ながら何度も繰り返した後、正しくまねることができる。
5才児	S0. 先生の発音をまねることができる。

### 〈高等学校〉

- ・これまでの教科書を活用するとともに、中学校までに学習した郷土や地球環境保全に関する内容を外国と比較したり、外国人と意見を交流したりするため、高校第1学年全員がカナダにある本町姉妹提携町に留学し、実践力を高める学習を行う。
- ・次期学習指導要領を見据え、高等学校卒業段階において身に付けさせたい資質・能力を、「場面や状況、背景、相手の表情や反応などを踏まえて、自分が伝えたいことを適切に伝えることができる」と位置付けるとともに、CAN-DOリストを作成し活用する。

### ② 新地球学…学習指導要領において目標を次のように設定した。

#### 第1章 「新地球学」の目標

身近な地域の自然や環境・防災、国際理解、エネルギー、文化などに感心をもち、自らの興味・関心を高め、具体的な活動や体験を通して自然の豊かさなどに気づき、自らの生活について考えさせるとともに、主体的に問題を解決する資質や能力を育成し、自然や人とのかかわり、地域のよさ、様々な場面で発生する災害の危険性や防災、環境を保全するための知識を身に付け、状況に応じた行動や環境保全のために主体的にかかわる態度を育て、自己の生き方を考える力を身に付ける。

また、持続可能な社会の構築の視点に立って指導内容の改善を図るため、「発達段階表」をESDの視点から整理し、ルーブリック評価を基点として授業づくりを行う。(次表)

ESDの視点	小学校	中学校	高等学校
	体験	整理	発信
批判	情報をもとに自分の考えや意見をもち、まわりの人と比べることができる	合理的、客観的な情報に基づいて自分の考えや意見をもち、まわりの人と比べることができる	合理的、客観的な情報や公正な判断に基づいて本質を見抜き、ものごとを思慮深く、建設的、協調的、代差的に思考・判断することができる
見通す	過去や現在に基づき、他者と協力しながら、ものごとを計画することができる	過去や現在に基づき、予想・予測・期待し、他者と協力しながら、ものごとを計画することができる	過去や現在に基づき、あるべき未来像（ビジョン）を予想・予測・期待し、それを他者と共有しながら、ものごとを計画することができる
多面性	人・もの・自然について理解し、様々な立場や視点で考える	人・もの・こと・社会・自然などのつながり・かわり・ひろがり（システム）を理解し、様々な立場や視点で考える	人・もの・こと・社会・自然などのつながり・かわり・ひろがり（システム）を理解し、それらを多角的、総合的に考えることができる
コミュニケーション	自分の気持ちや考えを伝えるように、コミュニケーションをとることができる	自分の気持ちや考えを伝えるとともに他者の気持ちや考えを聞きながら、積極的にコミュニケーションを行うことができる	自分の気持ちや考えを伝えるとともに他者の気持ちや考えを尊重し、積極的にコミュニケーションを行うことができる
協力	他者と協力・協同して、ものごとを進めることができる	他者の立場に立ちながら、協力・協同してものごとを進めようとするすることができる	他者の立場に立ち、他者の考えや行動に共感するとともに、他者と協力・協同してものごとを進めようとするすることができる
つながり	自分とのつながり・かわりに関心をもち、それらを大切にしようとするすることができる	自分とのつながり・かわりに関心をもち、それらを尊重し、大切にしようとするすることができる	人・もの・こと・社会・自然などと自分とのつながり・かわりに関心をもち、それらを尊重し大切にしようとするすることができる
参加	自分の発言や行動に責任を持ち、ものごとに参加しようとするすることができる	自分の発言や行動に責任を持ち、自分の役割を理解するとともに、ものごとに参加しようとするることができる	集団や社会における自分の発言や行動に責任を持ち、自分の役割を理解するとともに、ものごとに参加しようとする และสามารถ

### 〈小学校〉

- ・これまでの「新地球学」の教科書を活用し、身近な地域の体験の中で自然の豊かさに気付くとともに、環境に対する興味関心を高めることができるよう計画を立てる。
- ・地域の教育資源を活用してアイヌの文化や言葉を学習したり、先住民族について調べたりするなどして異なる文化や生活様式に触れる学習を行う。
- ・現在の教科横断的に学習する環境教育との関連性を明確にするため、年間指導計画に関連する教科を明記し学び漏れがないよう確認する。

### 〈中学校〉

- ・これまでの「新地球学」の教科書を活用し、総合的な学習の時間における職場体験学習や地域での調べ学習と関連させて提案したり協議したりする授業づくりを行う。
- ・中学3年生では、地域の過去・現在など学んできたことを基に、地域がより魅力的な町になるための提案を地域の関係者に評価してもらう授業を行う。
- ・ICT機器を活用し、ジオパークと関連した地域資源を紹介したり、環境を大切にする考えを発信する授業を行う。

### 〈高等学校〉

- ・これまでの「新地球学」の教科書を活用し、多面的・総合的な視点で地球環境システムを理解し、問題解決能力や科学的に探究する能力を高める授業を行う。（例：次表）

#### 【高等学校第3学年の年間計画】

時数・内容	具体的な取組内容	関連する教科等	領域
World Study	<ul style="list-style-type: none"> <li>・南北問題やフェアトレードについて知り、世界と日本のかかわりについて考える。</li> <li>・貿易ゲームを通じ開発途上国が抱える問題と環境問題について考える。</li> <li>・JICA研修員の母国についての調べ学習・プレゼン資料作成・発表する。</li> <li>・JICA研修員による母国紹介プレゼンや交流を通じて各国の現状について学ぶ。</li> </ul>	総合学習	A：地域の自然と環境・防災 B：地域の文化 C：国際理解 D：エネルギー
エネルギーの利用	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スターリングエンジンについて理解し、そのメリットと問題点について考える。</li> <li>・スターリングエンジンの実用性を検証し、鹿追町での利用法を考察する。</li> </ul>	理科	B：地域の文化 D：エネルギー
カナダ留学生との意見交換	<ul style="list-style-type: none"> <li>・来町した留学生と、環境問題や各国における取組の違いなどについてディスカッションする。</li> </ul>	地球コミュニケーションⅢ	A：地域の自然と環境・防災 C：国際理解 D：エネルギー
地産地消	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地産地消の意義について考察する。</li> <li>・鹿追町の特産物を活かした料理をつくる。</li> </ul>	フードデザイン	B：地域の文化 D：エネルギー
生物多様性	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生物多様性（種の多様性・遺伝的多様性・生態系の多様性）を保持する意義について知り、鹿追町における生物多様性保全の在り方について考察する。</li> </ul>	生物Ⅱ	A：地域の自然と環境・防災 B：地域の文化
地域防災	<ul style="list-style-type: none"> <li>・災害時避難所としての鹿追高校の在り方について考察、提言する。</li> </ul>	総合学習	A：地域の自然と環境・防災

## (2) 研究の経過

計画年次	重点となる実践内容
第1年次 (平成27年度)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○町内教職員の研究開発に関する参画意識を高める。</li> <li>○園児児童生徒の発達段階に応じた「発達段階表」を作成するなどして園児児童生徒に身に付けさせたい資質・能力の全体像を明確にする。</li> <li>○「発達段階表」に基づいた教科の指導計画を立て実施する。</li> <li>○教科の学習内容や順序を明確にしたカリキュラムを編成し実施する。</li> <li>○小学校において、認定こども園との関連を明確にし、「地球コミュニケーション」の教育課程を編成・実施することで、生きる力の基礎となる心情、意欲、態度の向上を図る。</li> <li>○教科の目標を明確にし、幼小中高の13年間のカリキュラムの区切りを「1-4-4-4」にした教育課程を編成する。</li> <li>○これまで研究してきた「新地球学」や道徳の要素を「地球コミュニケーション」に入れ、地域の教育資源を活用した学習や、アイヌの人たちの歴史・文化等に関する理解を深める学習計画を立て、実施する。</li> <li>○北海道教育庁作成の「北海道ふるさと教育指導プログラム」を活用した実践研究を進める。</li> <li>○「地球コミュニケーション」において教員が相互乗り入れするとともに、35時間のうち一定の授業時間（10時間程度）を用いて、進学（予定）先の学校で授業を実施する。</li> <li>○ICTを活用した学習について研究する。</li> </ul>
第2年次 (平成28年度)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ESDの視点から「地球コミュニケーション」と「新地球学」を捉え直し、教科の目標を明確にする。</li> <li>○地球コミュニケーションにおいては、CAN-DOリストを用いて、新地球学では、ルーブリックを用いて学習状況を見取り、教科研究を進める。</li> <li>○客観的評価（実用英語技能検定やGTEC for student等）を行い、コミュニケーションツールとしての英語力を高める。</li> <li>○「発達段階表」で設定された資質・能力と学習活動とのつながりを明確にし、他教科との関連が分かる年間指導計画及び評価規準を作成する。</li> <li>○「発達段階表」に基づいた授業の実践事例を収集する。</li> <li>○異学校間交流の成果と課題を踏まえるとともに、一層効果的な交流の在り方について検討する。</li> <li>○ICTを活用した授業の研究を行う。</li> </ul>
第3年次 (平成29年度)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○「地球コミュニケーション」、「新地球学」の学習指導要領や教科書を整備するとともに年間指導計画やルーブリック等の改善を図る。</li> <li>○幼小中高の13年間のカリキュラムの区切りを「1-4-4-4」とした効果と課題を明確にする。</li> <li>○各教科等への横断的な効果と課題を明確にする。</li> <li>○地球コミュニケーション及び新地球学の学習内容と研究指定終了後の各学年における教科の学習内容との関連表を作成し、研究指定終了後においても、研究の成果を活かした学びの連続性や系統性を踏まえた教育活動を継続することができるようにする。</li> <li>○地域の教育資源を資料にまとめ、持続可能な社会づくりに必要となる児童生徒の資質・能力を指導内容及び指導方法とともにまとめる。</li> <li>○ICTを活用した学習の効果をまとめる。</li> <li>○高校の教員と小・中学校の教員が一層連携して研究を進めるとともに研究指定終了後の平成30年度以降も、町内の各学校において連携が図られるよう町内の幼小中高の連携組織体制を確立させる。</li> <li>○研究の成果を取りまとめ、Webページなどで情報発信する。</li> </ul>

## (3) 評価に関する取組

第1年次 (平成27年度)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○各校の教務、研修主任からなる実行委員会を設置し、これまでの成果と課題を明確にする。</li> <li>○運営指導委員会による外部評価を実施し、内容の充実を図る。 平成27年6月23日、平成28年2月3日</li> <li>○全国学力・学習状況調査（4月実施）、教研式標準学力検査（対象：小中学校全児童生徒、1月実施）等による国語、社会、理科、算数・数学、英語の学力把握により改善の視点を明らかにし、指導計画の改善・充実を図る。</li> <li>○学校評議員会等へ研究開発の内容や成果、課題を公表する。</li> <li>○公開研究会を開催し、幼・小・中・高等学校における今年度の取組について協議する。（平成27年9月15日 町内外より200名参加）</li> <li>○児童生徒、教員、保護者によるアンケートを実施する。（2月実施） （校種別の成果と課題を把握することで改善策を明確にする。）</li> </ul>
第2年次 (平成28年度)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○第1年次の評価に基づく実践的研究を実施する。</li> <li>○4月28日全体研修会にて今年度の取組について全教職員の共通理解を図る。</li> <li>○全国学力・学習状況調査（4月実施）、教研式標準学力検査（1月実施）等による、国語、社会、理科、算数・数学、英語の学力把握により改善の視点を明らかにし、指導計</li> </ul>

	<p>画の改善・充実を図る。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○運営指導委員会による外部評価を実施し、内容の充実を図る。 平成28年6月28日（140名参加）、平成29年1月31日（140名参加）</li> <li>○公開研究会を開催し（9月15日）、幼・小・中・高等学校の一貫した連携の在り方について成果と課題を明確にする。（220名参加）</li> <li>○実地検査を依頼し、指導・助言を受ける。（11月24日実施）</li> <li>○児童生徒、教員、保護者によるアンケートを実施し（2月実施）、校種別の成果と課題を把握することで改善策を明確にする。</li> <li>○客観的評価を分析し、次年度に生かす。</li> </ul>
第3年次 (平成29年度)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○第2年次の評価に基づく実践的研究を実施する。</li> <li>○運営指導委員会による外部評価を実施し、内容の充実を図る。 平成29年6月27日、平成30年2月6日予定</li> <li>○公開研究会を開催し（9月15日）、新設教科とともに各教科等との関連について検証する授業を公開し、成果と課題を明確にする。（道内外より235名参加）</li> <li>○園児や児童生徒、教員、保護者によるアンケートを実施するほか、校種別の成果と課題を明確にする。</li> <li>○各種検定等の客観的な評価を分析し、教科研究の検証を行う。</li> </ul>

## 5 研究開発の成果

### (1) 実施による効果

#### ① 新設教科「地球コミュニケーション」

##### 5歳児～小学校第4学年への効果

第5期（平成27年度）より、カリキュラムの区切りを「1-4-4-4」とし、新設教科「地球コミュニケーション」において、5才児クラスのカリキュラムを編成・追加した。

この時期の「地球コミュニケーション」は、「遊び」からコミュニケーションの素地を養うことを目標とし、ALTやJTE、音声教材を用いて正しい英語をできるだけ多くの時間繰り返し触れさせるようにした。また、体を動かし、リズムをとり、まねる活動を多く取り入れるとともに、実物や絵カードなどを活用して具体物から五感を働かせる活動を取り入れた。さらにはアルファベットやフォニックスを用いて文字に慣れ親しませるとともに、簡単な会話ができるよう具体的な場面（live situation）をイメージできるような活動を工夫した。

その結果、保育教諭のアンケートでは、「幼児がコミュニケーションの場を広げたり、かかわる力を高めたりするのに効果があった」「幼児が自然に英語を使うようになった」「幼児の小学校に対する期待が増えるとともに、不安が少なくなった」という回答が得られた。

児童アンケートでは、「楽しく活動できた」と回答したのは、第1学年が93%、第2学年が86%、第3学年が85%、第4学年が75%であった。また、第1～4学年児童の81%が「英語で話したりすることが楽しくなった」と回答し、80%の児童が「これからも英語を勉強したい」と回答した。

これらの結果から、「地球コミュニケーション」の授業を行うことにより、「英語は楽しい」「これからも英語を学びたい」という気持ちが芽生え、下学年の児童の方がより意欲的に活動していくことから、幼児・低学年時期での英語教育の有効性が明らかになった。

##### 小学校第5学年～中学校第2学年への効果

この時期の「地球コミュニケーション」は、コミュニケーションの楽しさを味わい、そこから知的な興味・関心へとつなげていけることを目標とした。他教科等との関連から児童生徒が話したくなる話題を設定したり、異校種や同校種の学校との交流を行ったりした。また、コミュニケーションの場面を「特有の表現がよく使われる場面」と「児童生徒の身近な暮らしにかかわる場面」の二つに分けて設定したり、コミュニケーションの働きを「相手との関係を円滑にする」、「気持ちを伝える」、「事実を伝える」、「考えや意図を伝える」及び「相手の行動を促す」に分けて、具体的にかかわる力を身に付けさせたりするようにした。

その結果、児童生徒アンケートで「授業の中で友だちと会話したり、考えを交流することができた」と回答したのは、小学校第5学年が85%、第6学年で83%、中学校第1学年が93%、中学校第2学年が90%であった。また、「友だちと会話をする時、積極的にいろいろな人と話そうと心がけた」と回答したのは、小学校第5学年が65%、第6学年が68%、

中学校第1学年が80%、中学校第2学年が75%であった。さらには、「授業で発表するときに、相手や周りの人に伝わるように工夫して発表することができた」と回答したのは、小学校第5学年が60%、第6学年が69%、中学校第1学年が73%、中学校第2学年が75%であった。

これらの結果から、友だちと英語を使って会話をしたり、発表したりする有効な機会となったこと、学年が上がるにつれて、その意識が一層高まっていくことがわかった。これは、小学校第5学年と中学校第1学年、小学校第6学年と中学校第2学年などにおいて小中交流授業を積極的に実施し、中学生がリーダーシップをとって授業が進められた効果であると考えられる。

#### 中学校第3学年～高等学校第3学年への効果

この時期の「地球コミュニケーション」は、実践的コミュニケーション能力の向上を目標にした。言語活動において、実際のコミュニケーション場面を想起させ、必要感を持たせながら、互いの考えや気持ちを伝え合う活動を行った。取り上げる題材については英語だけではなく、他の言語を使用する人々に関しても理解を深めるとともに、日本人に対しても理解を深めることをねらいとした。また、短期留学等から世界や日本の生活・文化について理解を深め、これらを尊重する態度を養うとともに、スピーチ、ディスカッションにおいて、北海道とカナダの先住民の自然との共生について学び、人間と自然のより望ましい共生のあり方を考えるようにした。

その結果、生徒アンケートで「友だちの考えを聞いたり、自分の考えと比較したりして、言いたいことを積極的に伝えることができた」と回答した生徒は、中学校第3学年が77%、高等学校第1学年が73%、第2学年が71%、第3学年が70%であった。また、「授業で発表するときに、相手や状況（様子や理解度）にあわせた発表をすることができた」と回答した生徒は、中学校第3学年が78%、高等学校第1学年が67%、第2学年が59%、第3学年が68%であった。

これらの結果から、相手の意向を聞き取り、自分の考えを整理して、英語で発表したり、話し合ったりする実践的なコミュニケーション能力や様々な国の言語や文化に対する関心を高め、これらを尊重する態度を育むことができたと考えられる。

## ② 新設教科「新地球学」

#### 5歳児～小学校第4学年への効果

この時期の「新地球学」は、地域の自然にふれる具体的な活動や体験を通して、自分と自然とのかかわりに関心を持ち、遊びやふれあいを通して自然のすばらしさに気づき、自然を大切にしようとする心や態度を養うことを目標とした。学校周辺の散策から豊かな自然を体験したり、鹿追ネイチャーセンターやジオパーク、大雪山国立公園などの地域資源を活用したりした。また、循環型生活環境づくりに基づき、家畜の排せつ物や生ゴミをエネルギーに変える施設等を見学し、体験したことを伝えたりする学習などを展開した。

その結果、児童アンケートで「学校の周りや鹿追の自然の勉強がたくさんできた」と回答した児童は、第1学年が93%、第2学年が88%、第3学年が90%、第4学年が85%であった。また、「友だちといっしょに活動したり、たくさん話し合いをした」と回答した児童は、第1学年と第2学年で80%、第3学年で83%、第4学年で75%であった。さらには「授業の中で友だちと会話をしたり、考えを交流する時間があった」と回答した児童は、第1学年が78%、第2学年が83%、第3学年が78%、第4学年が72%であった。

これらのことから、低・中学年の「新地球学」のカリキュラムは、児童が身近な自然環境について協力して学び、自分の考えを出し合ったり、友だちの考えを聞いて話し合ったりする学びを展開することができたと考えられる。

#### 小学校第5学年～中学校第2学年への効果

この時期の「新地球学」は、地域の自然の豊かさに気づき、環境問題の現状についてとらえたり、地域の自然や産業の特色についてデータの収集や分析し、科学的に把握したりすること、環境保全に必要な知識・技能・価値観を身に付け、環境問題を解決するために多面的に考え、主体的に行動する態度を培うことを目標とした。

地域の探索から豊かな自然を体験し、自分たちの住んでいる地域のよさに気付いたり、

外部講師を活用して、環境の有限性について理解し、環境に対する考えを持てるようにした。また、体験活動を通じて、鹿追町の産業について特色を理解し、発信する活動等も行った。

その結果、生徒アンケートでは、「友だちと会話をしたり、考えを交流する時間があった」と回答した児童生徒は、小学校第5学年が75%、第6学年が82%、中学校第1学年が85%、中学校第2学年が83%であった。また、「授業の中で友だちと会話をしたり、考えを交流する時間があった」と回答した児童は、第5学年が75%、第6学年が80%、中学校第1学年が88%、第2学年が80%であった。

このことから、自分の考えを出し合ったり、友だちの考えを聞いて話し合ったりする深い学びを展開することができ、学年があがるにつれ、児童生徒の意識も高まってきたと考えられる。

#### **中学校第3学年～高等学校第3学年への効果**

この時期の「新地球学」は、自然に対する人間の様々な考え方について学び、背景にある環境問題を多面的にとらえたり、よりよい環境や新エネルギーについて討議したり、地球市民の一員として持続可能な社会を構築するための人間の在り方について考え、提言したりすることを目標とした。

授業では、地域の自然を見つめなおし、これまでの活動を振り返り、協力しながら問題を解決していく学びを取り入れ、再生可能エネルギーの実際と可能性について学ぶなど、将来の社会のエネルギーのあり方を考えたり、より望ましい環境保全のあり方を考え提言したりした。

その結果、生徒アンケートでは、「友だちと学習内容について協議したり、考えを深めたりする時間があった」と回答した生徒は、中学校第3学年が80%、高等学校第1学年が76%、第2学年が74%、第3学年が76%であった。また、「地域や身近な環境問題や世界のエネルギー問題等をテーマに自分の考えを積極的に伝えることができた」と回答した児童は、中学校第3学年が69%、高等学校第1学年が65%、第2学年が66%、第3学年が76%であった。

これらのことから、環境と人間の関係について課題を発見し、情報を集め、様々な視点から自分の考えを深め、考えたことを発信できる力を育成することができたと考える。

### **③ 教員への効果**

全9校（園）の教員からなる2つの教科開発部会を構成し、指導の進捗状況や評価方法の確認、指導内容の協議や指導案検討等を行い、幼小中高等学校で行われる授業の交流を行った。また、交流授業を進める部会や地域連携を進める部会等も組織し、「考動力」をキーワードに研究指定校の全教職員が一体となって取組を推進することができた。

教員に対するアンケートでは、「英語に慣れ親しみ、興味・関心を持たせる活動ができた」と回答した教員は、認定こども園が80%、小学校が85%、中学校が72%、高等学校が73%であった。中学校と高等学校は専科教員による指導を行っていることから小学校及び認定こども園の数値が高くなっていると考えられるが、中学校や高等学校の各教科や領域においても、地球コミュニケーション（英語）を意識して指導していることがわかった。

一方で、「地域や世界の環境等の情報を活用して、環境について考えさせる授業に取り組んでいる」と回答した教員は、小学校で69%、中学校で93%、高等学校で76%であり、「新地球学」の授業の充実に対する意識は中学校や高等学校の教員で高いことがわかった。

また、「交流授業は幼小中高の教科等の系統性や学びのルールを理解する際に効果がある」と回答した教員は、認定こども園で83%、小学校で77%、中学校で81%、高等学校で70%であり、「交流授業はコミュニケーションの場を広げたり、かかわる力を高めたりするために効果があると思う」と回答した教員は、認定こども園で90%、小学校で88%、中学校で93%、高等学校で71%であった。

これらのことから、交流授業を適時実施しながら、小学校低学年における「地球コミュニケーション（英語教育）」、小学校高学年から高等学校までの「新地球学」の授業を一層充実させていくとともに、中学校・高等学校における「地球コミュニケーション（英語教育）」、小学校での「新地球学」のカリキュラムや授業の在り方について再確認し、取組の改善・充実を図っていくことが大切であると考えた。



#### ④ 地域・保護者への効果

地域に対しては、これまで本町の広報誌や地域行事等で幼小中高一貫教育の取組を紹介する機会を設けてきた。幼児児童生徒が「地球コミュニケーション」や「新地球学」の学びについて発表する場もあり、広く町民に理解されている。「地球コミュニケーション」や「新地球学」の授業に対しても協力的で外部講師として参画していただける体制（つながり）ができています。

アンケートでは、「英語を柱としたコミュニケーション力を身に付ける地球コミュニケーションという教科をどう思うか」という問いに対して、「たいへん良い」「まあ良い」と回答した保護者は、小学校で90%、中学校で83%、高等学校で86%であった。また、「環境保全のために積極的に力のかかわる力を身に付け、住みよい未来づくりのために実践する人づくりを進める新地球学という教科をどう思うか」という問いに対して、「たいへん良い」「まあ良い」と回答した保護者は、小学校で91%、中学校で86%、高等学校で83%であった。

また、「学校間の交流学习」については、「たいへん良い」「まあ良い」と回答した保護者は、小学校で94%、中学校で88%、高等学校で85%であり、「一貫教育を続けること」については、「たいへん良い」「まあ良い」と回答した保護者は、小学校で92%、中学校で87%、高等学校で87%であった。

これらの結果から、「地球コミュニケーション」及び「新地球学」を主軸とした本町の一貫教育は、広く保護者や町民に理解され、町全体の取組となっていることから今後も何らかの形で継続してほしいという願いがあることがわかった。

#### (2) 実施上の問題点と今後の課題

研究開発の取組は、教員が地域のなかで、学習環境とともに幼児児童生徒を理解することで幼小中高の滑らかな指導の接続を図ることと、多くの授業公開を通しての教員の授業力向上やより良い教材開発などに大きな成果が見られた。しかしながら、この研究が本来の教育課程における各教科等にどのような影響を及ぼしたかを確認することも大切である。

この成果を広く紹介し、課題についても焦点化することで、さらなる充実を図っていきたいと考える。

- ① 研究してきた新設教科に対し、それぞれの目標の達成に向けて取り組んできたが、今後はその先にある主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に向けた取組が求められる。
- ② 自立的な人格の形成を目指した21世紀を生き抜くために必要な汎用的な資質・能力がどのように身に付いたか評価し、教科学習の先にある能力を見据えた指導が求められる。
- ③ 「新地球学」においては、持続可能な開発のための教育（ESD）や防災教育について、学習を進めてきたが、さらに積極的に考え地域や社会とかかわる力（考動力）の向上に向けた授業実践が求められる。
- ④ 小学校第3・4学年の外国語活動、第5・6学年の外国語（英語）に「地球コミュニケーション」のカリキュラムや評価をどのように接続させるか、あるいはどのように活用していくか検討していく必要がある。
- ⑤ 小学校第4学年以上に一人一台のタブレット端末を導入したが、他教科も含め「地球コミュニケーション」「新地球学」の学びの中でどのように活用すると、効果的な学びとなるか、研究を重ねていく必要がある。
- ⑥ 作成した教科書については印刷費等で多額なものとなる。今後は、容易に改訂したり、更新したりするため、電子化を検討する必要がある。

## ○鹿追町立認定こども園しかおい

年間10時間の「地球コミュニケーション」を実施する。

○鹿追小学校、瓜幕小学校、通明小学校、上幌内小学校、笹川小学校  
教育課程表（平成29年度）

	各教科の授業時数									道徳	外国語活動	特別活動	総合的な学習の時間	新設教科		総授業時数
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育					地球コミュニケーション	新地球学	
第1学年	306		136		48 (-54)	68	68		102	34		34		34 (+34)	32 (+32)	863 (+12)
第2学年	315		175		50 (-55)	70	70		105	35		35		35 (+35)	32 (+32)	922 (+12)
第3学年	245	70	175	90		60	60		105	35		35	0 (-70)	35 (+35)	35 (+35)	945
第4学年	245	90	175	105		60	60		105	35		35	0 (-70)	35 (+35)	35 (+35)	980
第5学年	175	100	175	105		50	50	60	90	35	0 (-35)	35	35 (-35)	35 (+35)	35 (+35)	980
第6学年	175	105	175	105		50	50	55	90	35	0 (-35)	35	35 (-35)	35 (+35)	35 (+35)	980

第1学年生活科54時間、第2学年生活科55時間を減じて、総授業時数を増やして地球コミュニケーション34時間（第1学年）、35時間（第2学年）と新地球学32時間（第1・2学年）を実施する。第3・4学年において、総合的な学習の時間70時間を減じて、地球コミュニケーション35時間、新地球学35時間を実施する。第5・6学年において、外国語活動35時間を減じて、地球コミュニケーション35時間を実施する。また、総合的な学習の時間の35時間を減じて、新地球学を実施する。

## ○鹿追中学校、瓜幕中学校 教育課程表（平成29年度）

	各教科の授業時数									道徳	特別活動	総合的な学習の時間	新設教科		総授業時数
	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健体育	技術家庭	英語				地球コミュニケーション	新地球学	
第1学年	140	100 (-5)	140	100 (-5)	45	45	105	70	105 (-35)	35	35	25 (-25)	35 (+35)	35 (+35)	1015
第2学年	140	100 (-5)	105	135 (-5)	35	35	105	70	105 (-35)	35	35	45 (-25)	35 (+35)	35 (+35)	1015
第3学年	105	135 (-5)	140	135 (-5)	35	35	105	35	105 (-35)	35	35	45 (-25)	35 (+35)	35 (+35)	1015

全学年において、社会、理科から各5時間、総合的な学習の時間から25時間を減じて、新地球学を実施する。また、英語35時間を減じて、地球コミュニケーションを実施する。

○鹿追高等学校 教育課程表（平成29年度）

教科	科目		1年			2年			3年				計		
			必修			必修			必修			選択			
	科目名	標準 単位数	特進	国教	情ビ	特進	国教	情ビ	特進	国教	情ビ		特進	国教	情ビ
国語	国語総合	4	5	5	5								5	5	5
	国語表現	3						2			2				4
	現代文A	2													
	現代文B	4				2	2		2	2			4	4	
	古典A	2													
	古典B	4				2			2				4		
地歴	世界史A	2				2	2	2					2	2	2
	世界史B	4													
	日本史A	2													
	日本史B	4									4		0~4	0~4	0~4
	地理A	2	2	2	2								2	2	2
	地理B	4									4		0~4	0~4	0~4
公民	現代社会	2									2				2
	倫理	2							2	2			2	2	
	政治・経済	2							2	2			2	2	
数学	数学Ⅰ	3	3	3	3								3	3	3
	数学Ⅱ	4				4	2			2			4	4	
	数学Ⅲ	5							2		4		0~6		
	数学A	2	2	2	2								2	2	2
	数学B	2				2							2		
	数学活用	2						2							2
理科	科学と人間生活	2					2	2						2	2
	物理基礎	2				2							2		
	物理	4							4				0~4		
	化学基礎	2	2	2	2								2	2	2
	化学	4				2			3				5		
	生物基礎	2	2	2	2								2	2	2
	生物	4					2		4	3			0~4	5	
	地学基礎	2													
	地学	4													
理科課題研究	1														
保健体育	体育	7~8	2	2	2	3	3	3	2	2	2		7	7	7
	保健	2	1	1	1	1	1	1					2	2	2
芸術	音楽Ⅰ	2	2	2	2								2	2	2
	音楽Ⅱ	2					2	2					2	2	
	音楽Ⅲ	2							2	2			2	2	2
外国語	コミュニケーション英語Ⅰ	3	3	3	3								3	3	3
	コミュニケーション英語Ⅱ	4				5	4						5	4	
	コミュニケーション英語Ⅲ	4							5				5		
	英語表現Ⅰ	2								2				2	
家庭	家庭基礎	2				2	2	2					2	2	2
情報	社会と情報	2	2	2	2	1	1	1					2	2	2
数学	生活の数学	1	1	1	1								1	1	1
	実用数学	1~2									2		0~2	0~2	0~2
	数学課題研究	2							2				0~2		
	数学に親しむ	2									2				2
理科	理科の実験	2								2	2		0~2	0~2	2
保健体育	生涯スポーツ	2~3								3	3		3	3	3
地球コミュニケーション	地球コミュニケーションⅠ	1	2	2	2								1	1	1
	地球コミュニケーションⅡ	2					2	2						2	2
	地球コミュニケーションⅢ	2							2					2	
商業	課題研究	2~6									2				2
	簿記	2~6						3		3				6	
	情報処理	2~6									2		0~2	3~5	3~5
家庭	ライフデザイン	1~2							2	2			2	2	
音楽	器楽	2~8									2		0~2	0~2	0~2
英語	異文化理解	2~6									2		0~2	0~2	0~2
	実用英語	2						3			2				5
総合的な学習の時間(新地球学と進路学習)			1			1			1				3	3	3
合計			29	29	29	29	29	29	29	29	29		87	87	87
L.H.R			1			1			1				3	3	3

「地球コミュニケーション」を年間70時間実施する。「新地球学」を総合的な学習の時間において35時間実施する。

## 別紙 2

1	北海道鹿追高等学校 外 8 校 (園)	27~29
---	---------------------	-------

- 1 北海道鹿追高等学校 (ホッカイドウシカオイコウトウガッコウ)  
校長 志 知 芳 彦 (シチ ヨシヒコ)

- 2 所在地 北海道河東郡鹿追町西町 1 丁目 8 番地  
電話番号 0156-66-3011  
FAX番号 0156-66-3012

3

課程	学科	第 1 学年		第 2 学年		第 3 学年		計	
		生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
全日制	普通科	63	2	79	2	71	2	213	6
	計	63	2	79	2	71	2	213	6
計		63	2	79	2	71	2	213	6

4

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1		1			19		1			
ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計						
		4		26						

- 1 鹿追町立鹿追小学校 (シカオイチョウリツシカオイショウガッコウ)  
校長 梶 原 源 基 (カジワラ ゲンキ)

- 2 所在地 北海道河東郡鹿追町東町 3 丁目 2 番地  
電話番号 0156-66-2139  
FAX番号 0156-69-7111

3

第 1 学年		第 2 学年		第 3 学年		第 4 学年		第 5 学年		第 6 学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
35	2	31	2	34	1	38	1	44	2	44	2	226	10
		情3 言1		情3		情1		情1		弱1 知1		11	4

4

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1		1			19		1			
ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計						
		1		23						

1 鹿追町立瓜幕小学校（シカオイチョウリツウリマクシヨウガッコウ）  
校長 吉 本 徹（ヨシモト トオル）

2 所在地 北海道河東郡鹿追町瓜幕東3丁目8番地  
電話番号 0156-67-2323  
FAX番号 0156-67-2324

3

第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
5	1	6	1	5	複式1	5		4	複式1	6		31	4
						肢1							2
						言1							

4

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1		1			6		1			
ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計						
		1		9						

1 鹿追町立通明小学校（シカオイチョウリツウメイシヨウガッコウ）  
校長 太 田 道 夫（オオタ ミチオ）

2 所在地 北海道河東郡鹿追町中瓜幕西20線25番地  
電話番号 0156-67-2466  
FAX番号 0156-67-2468

3

第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
3	複式1	4		1	複式1	2		4	複式1	3		17	3

4

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1		1			4		1			
ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計						
		1		8						

1 鹿追町立上幌内小学校（シカオイチョウリツカミホロナイショウガッコウ）  
校長 小 西 一 寿（コニシ カズヒサ）

2 所在地 北海道河東郡鹿追町上幌内4線南3番地  
電話番号 0156-66-3380  
FAX番号 0156-66-3666

3

第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
0	0	6	1	3	複式 1	1		1	複式 1	1		12	3
言1		情1		難1						情1		3	3

4

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1		1			5		1			
ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計						
		1		9						

1 鹿追町立笹川小学校（シカオイチョウリツササガワショウガッコウ）  
校長 織 茂 竜二郎（オリモ リュウジロウ）

2 所在地 北海道河東郡鹿追町笹川北9線10番地31  
電話番号 0156-66-3505  
FAX番号 0156-66-3520

3

第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
2	複式 1	4		1	複式 1	1		4	複式 1	6		18	3

4

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1		1			4		1			
ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計						
		1		8						

1 鹿追町立鹿追中学校（シカオイチョウリツシカオイチュウガッコウ）  
校長 中 村 宏 喜（ナカムラ コウキ）

2 所在地 北海道河東郡鹿追町鹿追北4線8番地  
電話番号 0156-66-3704  
FAX番号 0156-66-2044

3

第1学年		第2学年		第3学年		計	
生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
42	2	51	2	43	2	136	6
情1知1		言1		情2病1		6	4

4

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1		1			16		1			
ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計						
		1		20						

1 鹿追町立瓜幕中学校（シカオイチョウリツウリマクチュウガッコウ）  
校長 内 田 得 裕（ウチダ トクヒロ）

2 所在地 北海道河東郡鹿追町瓜幕西27線23番地  
電話番号 0156-67-2244  
FAX番号 0156-67-2251

3

第1学年		第2学年		第3学年		計	
生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
9	1	10	1	7	1	26	3
言1		情1				2	2

4

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1		1			8		1			
ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計						
		1		12						

1 鹿追町立認定こども園しかおい（シカオイチョウリツニンテイコドモエンシカオイ）  
園長 崎野靖子（サキノ ヤスコ）

2 所在地 北海道河東郡鹿追町仲町1丁目31  
電話番号 0156-66-2104  
FAX番号 0156-66-2167

3

0・1才児		2才児		3才児		4才児		5才児		計	
園児数	学級数	園児数	学級数	園児数	学級数	園児数	学級数	園児数	学級数	園児数	学級数
29	3	21	1	37	2	27	1	46	2	160	9

4

園長	副園長	係長	教務主査	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1	2	1		11	8			1	
ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計						
		2		27						